

〔島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要 Vol. 56 165～171 (2017)〕

# 小学校音楽科にみる器楽教育の楽曲研究 (1)

## —器楽教育における教材曲の教育的価値—

梶 間 奈 保

(島根県立大学短期大学部 保育学科)

Research on Teaching Materials for Musical Instrumentals in ESME

Nao KAJIMA

キーワード：音楽教育 器楽 初等音楽科 楽曲分析  
music education, instrumental music,  
Elementary School Music, analysis musical

### 1. 研究の背景と目的

日本における音楽科教育の出発点および中心的存在は唱歌教育であり、現在もなお唱歌教材や指導法に関して多くの研究や議論が重ねられている。一方、器楽教育は明治期に制度として導入されるも器楽教育の内容が唱歌教育のように充実したものとはいえず、器楽教育を実践するにあたって「楽器の低質不足」や「教材の不足」など課題が山積みであった<sup>1)</sup>と藤井(2016)は指摘する。しかし、今日の音楽科の学習指導要領では、唱歌教育の領域である「歌唱」、そして「器楽」「創作」(小学校音楽科では「音楽づくり」)「鑑賞」の4領域を軸として、それぞれ相互に関連しながら活動することが求められている。学習指導要領が改訂される前の文部科学省による学習指導要領の課題(検討素案)では、「歌唱の活動に偏る傾向があり、表現の他の分野と鑑賞の学習が十分でない状況が見受けられる」<sup>2)</sup>と歌唱教育への偏重が指摘されている。また保育園や幼稚園で行われる音楽活動では器楽を取り扱った実践(主に合奏)

は多いが、それらを対象とした現場実践での研究やカリキュラム検討の研究は少ないといった指摘もある<sup>3)</sup>。このような器楽教育に関する研究の背景について長井(2016)は「器楽領域でカバーすべき内容が広範囲に、他領域との関連がより複雑になった」<sup>4)</sup>と述べ、器楽指導の曖昧さや楽器を介した児童らの育ちが置き去りにされたと示唆している。

こういった音楽科教育の現状の中、器楽に焦点をあてて研究をすることは、音楽教育においてどのような価値があるのだろうか。器楽教育の場合、児童らが楽器の特徴や奏法を理解して楽器演奏の技能を高めるだけではなく、楽器の演奏を通して曲想の理解へとつなげたり、自身の音楽表現を深めたりすることが活動の中で求められている。このような児童の学びを引き出すために教師側は、①楽器の教材研究と②演奏する楽曲の教材研究、そして③合奏指導、以上の3点を器楽教育において重要な視点として意識する必要がある。①については、各学年で導入される楽器は類似しており、奏法の理解が中心となる。

また③については、合奏を指導する上で、互いの音をよく聴き、伴奏や他パート、あるいは曲全体を把握しながらリズムや音を合わせるといった合奏の視点は、どの学年においても基本的には一緒である。一方、②の楽曲の教材研究については、活動のねらいに応じて楽曲の視点や取り上げ方が違い、合奏の際の編成や内容の違いによっても音楽の感じ方に变化が生じてくる。つまり、楽曲の教材研究が楽器の有効的な活用や合奏の指導にもつながるといえる。そこで本研究では、器楽教育で取り上げられる楽曲に着目し楽曲研究の重要性について明らかにすることを目的とする。そして、新たな器楽教育の教材を開拓し器楽教育のさらなる充実を図っていききたい。まず本稿では、小学校学習指導要領および先行研究を踏まえて器楽教育の楽曲分析の教育的価値について述べていく。

## 2. 小学校学習指導要領における器楽の概観

小学校音楽科では「器楽」「歌唱」「音楽づくり」を〔A表現〕、「鑑賞」を〔B鑑賞〕と区分しているが、音楽科の目標に「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う」<sup>5)</sup>と述べられているように、各区分が互いに関わりを持ちながら総合的に共通の目標へと向かっていく。〔A表現〕では、児童の内面で意識されていく音楽に対する「思いや意図」といった表現に目を向け、〔B鑑賞〕では、音楽を聴く行為の中で、音楽の特徴的な要素を意識したり、そのおもしろさや美しさを感じることが求められる。そして、これらがそれぞれ独立した内容として指導されるのではなく、両者が関わり合いながら音楽活動を展開していくことが重要となる。また、表現及び鑑賞の全ての活動において、共通に指導する項目である〔共通事項〕が設けられており、この〔共通事項〕が表現と鑑賞に必要な能力を育成するための共有内容の軸となり、様々な活動を進めていく（図1参照）。

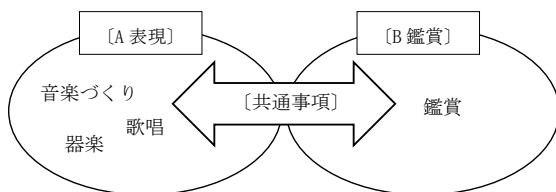


図1. 小学校学習指導要領における音楽科の各区分と共通事項との関係性のイメージ図

### 1) 音楽科の〔共通事項〕について

先述した表現と鑑賞活動を関連づける〔共通事項〕には、器楽を含む表現活動及び指導の観点が盛り込まれている。以下の表1は各学年の〔共通事項〕を筆者がまとめたものである。

表1. 小学校学習指導要領における〔共通事項〕  
—各学年のまとめ—<sup>6)</sup>

学年	内容
第1学年及び第2学年	ア 音楽を形づくっている要素のうち次の〔ア〕及び〔イ〕を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取ること。 〔ア〕 音色、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れやフレーズなどの音楽を特徴付けている要素
	〔イ〕 反復、問いと答えなどの音楽の仕組み
	イ 身近な音符、休符、記号や音楽にかかわる用語について、音楽活動を通して理解すること。
第3学年及び第4学年	ア 音楽を形づくっている要素のうち次の〔ア〕及び〔イ〕を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取ること。 〔ア〕 音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なり、音階や調、拍の流れやフレーズなどの音楽を特徴付けている要素
	〔イ〕 反復、問いと答え、変化などの音楽の仕組み
	イ 音符、休符、記号や音楽にかかわる用語について、音楽活動を通して理解すること。
第5学年及び第6学年	ア 音楽を形づくっている要素のうち次の〔ア〕及び〔イ〕を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取ること。 〔ア〕 音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なりや和声の響き、音階や調、拍の流れやフレーズなどの音楽を特徴付けている要素
	〔イ〕 反復、問いと答え、変化、音楽の縦と横の関係などの音楽の仕組み
	イ 音符、休符、記号や音楽にかかわる用語について、音楽活動を通して理解すること。

※表中の太字は筆者が強調のため太字にしたもの

このように各学年の指導内容は、主に音色やリズムといった「要素」、音楽の構造的部分である「仕組み」、そして、「音楽用語の理解」の3点にまとめられ、これらを表現のみならず鑑賞活動の中でも取り扱うよう記載されている。

### 2) 器楽の指導内容について

音楽科の各学年の器楽の指導内容は表2にみられるように、子どもの発達段階に応じて記述内容に若干変化があるものの、各学年ともに基本的な要素は

次の４点にまとめられる。

- ・楽譜をもとに演奏
- ・自己表現を意識して演奏
- ・楽器の特徴を生かして演奏
- ・合奏（アンサンブル）への留意

この４点の要素は、学年が進むにつれて演奏時に意識する点がより詳細になり（表２の中に筆者が太字で示した箇所）、音楽的な知識も要求されるようになる。

表２．小学校学習指導要領における「器楽」の指導内容—各学年のまとめ—<sup>6)</sup>

学年	内容
第1学年及び第2学年	ア 範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏すること。
	イ 楽曲の気分を感じ取り、思いをもって演奏すること。
	ウ 身近な楽器に親しみ、音色に気を付けて簡単なリズムや旋律を演奏すること。
第3学年及び第4学年	エ 互いの楽器の音や伴奏を聴いて、音を合わせて演奏すること。
	ア 範奏を聴いたり、ハ長調の楽譜を見たりして演奏すること。
	イ 曲想にふさわしい表現を工夫し、思いや意図をもって演奏すること。
第5学年及び第6学年	ウ 音色に気を付けて旋律楽器及び打楽器を演奏すること。
	エ 互いの楽器の音や副次的な旋律、伴奏を聴いて、音を合わせて演奏すること。
	ア 範奏を聴いたり、ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして演奏すること。
第5学年及び第6学年	イ 曲想を生かした表現を工夫し、思いや意図をもって演奏すること。
	ウ 楽器の特徴を生かして旋律楽器及び打楽器を演奏すること。
	エ 各声部の楽器の音や全体の響き、伴奏を聴いて、音を合わせて演奏すること。

※表中の太字は筆者が強調のため太字にしたもの

### 3) 楽曲教材について

次の表３は器楽で扱われる楽曲教材についてまとめたもので、小学校学習指導要領では第１学年から第４学年においては「主となる器楽教材については、既習の歌唱教材を含めて」<sup>6)</sup>と記述されている。各学年の共通教材として４曲の楽曲が提示されているが、それ以外の教材を選択する際には、「簡単なリズム伴奏」（第１学年及び第２学年）が加わった楽曲から「簡単な重奏や合奏」の楽曲（第３学年及び第４学年）へと変化していく。

表３．小学校学習指導要領における器楽教材の内容—各学年のまとめ—<sup>6)</sup>

学年	内容
第1学年及び第2学年	イ 主となる器楽教材については、既習の歌唱教材を含めて、 <b>主旋律に簡単なリズム伴奏や低声部などを加えた楽曲</b> 「うみ」（文部省唱歌）林柳波（はやしりゅうは）作詞 井上武士（いのうえたけし）作曲、「かたつむり」（文部省唱歌）、「日のまる」（文部省唱歌）高野辰之（たかのたつゆき）作詞 岡野貞一（おかのていいち）作曲、「ひらいたひらいた」（わらべうた） 「かくれんぼ」（文部省唱歌）林柳波作詞 下総皖一（しもふさかんいち）作曲、「春がきた」（文部省唱歌）高野辰之作詞 岡野貞一作曲、「虫のこえ」（文部省唱歌）、「タヤけこやけ」中村雨紅（なかもろうこう）作詞 草川信（くさかわしん）作曲
	イ 主となる器楽教材については、既習の歌唱教材を含めて、 <b>簡単な重奏や合奏にした楽曲</b> 「うさぎ」（日本古謡）、「茶つみ」（文部省唱歌）、「春の小川」（文部省唱歌）高野辰之作詞 岡野貞一作曲、「ふじ山」（文部省唱歌）巖谷小波（いわやさぎなみ）作詞 「さくらさくら」（日本古謡）、「とんび」葛原（くずはら）しげる作詞 梁田貞（やなただだし）作曲、「まさばの朝」（文部省唱歌）船橋栄吉（ふなばしえいきち）作曲、「もみじ」（文部省唱歌）高野辰之作詞 岡野貞一作曲
第5学年及び第6学年	イ 主となる器楽教材については、 <b>楽器の演奏効果を考慮し、簡単な重奏や合奏にした楽曲</b> 「こいのぼり」（文部省唱歌）、「子もり歌」（日本古謡）、「スキーの歌」（文部省唱歌）林柳波作詞 橋本国彦（はしもとくにひこ）作曲、「冬げしき」（文部省唱歌） 「越天楽今様（えてんらくいまよう）（歌詞は第2節まで）」（日本古謡）葛城（じちん）和南作歌、「おぼろ月夜」（文部省唱歌）高野辰之作詞 岡野貞一作曲、「ふるさと」（文部省唱歌）高野辰之作詞 岡野貞一作曲、「われは海の子（歌詞は第3節まで）」（文部省唱歌）
	※表中の太字は筆者が強調のため太字にしたもの

このように、各学年に応じて指導内容や教材の観点により詳細となり、これらをもとに授業が組み立てられていく。また、楽器の数や種類といった物的環境や児童の人数や学習状況にも応じて、合奏の表現形態を選択することが求められている。そして取り上げる楽器は、表２の指導内容と関連しながら、楽器が選択される（表４参照）。

表４．小学校学習指導要領における楽器に関する内容—各学年のまとめ—<sup>6)</sup>

学年	器楽の指導内容（抜粋）	楽器
第1学年及び第2学年	ウ 身近な楽器に親しみ、音色に気を付けて簡単なリズムや旋律を演奏すること。	様々な打楽器、オルガン、ハーモニカなど
第3学年及び第4学年	ウ 音色に気を付けて旋律楽器及び打楽器を演奏すること。	既習の楽器、リコーダー、鍵盤楽器
第5学年及び第6学年	ウ 楽器の特徴を生かして旋律楽器及び打楽器を演奏すること。	既習の楽器、電子楽器、和楽器、諸外国に伝わる楽器

### 3. 器楽教育に関する先行研究

#### 1) 器楽教育に関する研究の動向

器楽教育に関する研究は一体どのような内容があげられているだろうか。筆者が、小学校学習指導要領が改訂された平成20年から平成27年までの7年間、日本音楽教育学会や日本学校音楽教育実践学会などの学会誌に掲載された論文及び実践報告、そして大学や学校機関の紀要での初等器楽教育に関する研究のタイトル及び研究内容から得られたキーワードを元にカテゴリー分けした結果、調査をした論文の中の約6割が授業案や授業構成に関する内容であった。また、器楽研究では楽器を使用した合奏やアンサンブル（以下、合奏）での授業頻度も多くなることから、合奏活動を通した研究が全体のうち約7割を占めていた。論文で取りあげられている楽器は、和楽器（和太鼓、篠笛）がやや多く、リコーダーや鍵盤ハーモニカについても実践検討が行われていた。

この結果を踏まえると、器楽教育の研究内容が全体的に授業実践を通して合奏の重要性や児童らの学習効果を高めていこうとする傾向がみられる。また、和楽器を対象にした研究では、小学校学習指導要領改訂における音楽科の改善の基本方針の1つである「我が国や郷土の伝統音楽の指導が一層充実して行われるようにする」<sup>7)</sup>という内容を受け、研究が多く取り組まれたのではないだろうか。

以上のように音楽科において器楽教育の先行研究や論議が過少ではあるが、器楽活動を通した授業構成の確立や子どもの演奏表現の工夫に着目し、学習効果や評価との関連性を見出そうとする研究もみられる。

#### 2) 器楽教育の教育的価値

器楽が歌唱、鑑賞及び創作と違う点として「楽器を介した表現」があげられる。歌唱は自身の声を用いて活動し、鑑賞は外界からの聴覚刺激を受けて楽曲の構造や背景を探っていく。創作では、ふしづくりやリズム創作を楽器を使用して活動を実施することが多い。一方、器楽の場合、演奏技能の向上が活動の中心となることはなることはもちろん、それを

用いて自身の演奏表現について考えたり、他者と一緒に演奏する合奏を通して音楽要素について具体的に意識することがねらいとなる。

小島（2014）は器楽教育の特性について、自分の行為によって得られた結果が目や耳で直接実感できる明白さが器楽の特性と述べている<sup>8)</sup>。つまり、身体や諸感覚器官を通して音の高低の変化や音の発音の構造といった仕組みや音楽理論を実感し、それらが音楽に対する思考を拓け、音楽に関する知識や技能取得につながってくるのである。

衛藤・廣津ら（2014）は、合奏について「技能習得のために何度も練習する姿ではなく、子ども自らが音を探求し、自分たちで奏法を考え、教え合う姿」が主体的な合奏を行うことに関連していると指摘する。その理由については、器楽の授業の場合、技能習得に重点を置くのではなく、明確なイメージや意図をもってアンサンブルに取り組めるような場の設定が、子ども自身の技能向上につながったと述べている<sup>9)</sup>。これらの器楽における教育的価値を整理すると、以下の2点があげられる。

- ・ 楽器との直接体験を通して演奏表現に関する理論が明確化され、かつ能動的な学習につながる
- ・ 合奏活動において、活動内容の明確化と学習者の演奏に対する明確なイメージや意図が、技能の高まりにつながる

次に、器楽活動における教材曲の教育的価値についてまとめる。

村尾（2009）は「膨大な数の楽曲の中から教材として教えるにふさわしい楽曲を選択する」ことも音楽教師の重要な役割の1つとし、楽曲の人気投票のような量的な見方ではなく教材の「質的分析を踏まえた価値判断」<sup>10)</sup>の必要性を指摘している。その上で、村尾（2009）は共通歌唱教材の批評分析を行い、「故郷」（高野辰之作詞、岡野貞一作曲）の教材曲を評価している。

梶田（2012）は、教科書に掲載されている楽曲内容と原曲との違いに着目し「冬の歌」（中山知子作詞、フリストネジャルコフ作曲）と「雪のおどり」（油

井圭三作詞、チェコスロバキア民謡）を取り上げ、児童の発達段階を考慮して編曲がなされていたと述べている<sup>11)</sup>。具体的には、各出版社が以下のような工夫を行い楽曲の難易度を調整し、それらが今日の教科書に影響している。

- ・跳躍音程の回避
- ・二部合唱部から斉唱への変更
- ・繰り返しの削除
- ・テンポ設定の違い
- ・原曲からの移調（音域の変更）
- ・簡易伴奏化

このように原曲を学校現場の実態に合わせて編曲する方法は、器楽教材のみならず音楽科においては必要不可欠である。特に器楽の場合、教師側の教材曲の分析や学習者の発達を考慮した楽曲の編曲といった教材作りが必要となり、それらが先述した楽器演奏時の工夫や合奏活動といった器楽教育の軸となってくる。

## 4. 考察

### 1) 学習指導要領からみる教材曲の位置づけ

学習指導要領における器楽教育では、演奏を介して楽譜の理解をすることや表現力のある演奏を目指すことが学年によって記載されており、楽器に関しても児童の発達段階を考慮した楽器が記載されている。また器楽教材の内容には、歌唱教材の楽曲を中心として既存の楽曲を簡単にしたものや合奏用にしたものといった指示があり、各学年で教材曲の提示がされているものの、児童らが演奏する楽曲は教師側の判断に委ねられている。しかし、教師の教材楽曲に対する判断の中には、各学年の指導内容と関連する楽曲や児童らの演奏技能に適した楽曲でなければならない。つまり、学習指導要領の指導内容を反映させた内容と児童が演奏できる内容、この両者を融合した楽曲の選択を教師側が行わなければならない。そのため、器楽教育において教材曲は重要な位置づけであるとともに、教材曲の音楽的分析をすることが学習指導要領の内容で示された詳細な曲想の

理解へとつながるといえる。

### 2) 器楽教育研究における教材研究の視点

器楽教育研究では、演奏技術の習得や合奏や演奏がどのように工夫されたかといった学習者や学習状況に着目する研究が多く取り上げられていた。しかし、演奏する楽器や楽譜、あるいは楽曲といった教材によって学習内容が異なったり、学習の効果にも違いが現れるといえる。また、村尾（2009）が指摘したように膨大な楽曲の中から教材に適した楽曲を選択する必要がある、楽曲を教材化する教師側の質的な（音楽理論を踏まえた）分析である楽曲の教材研究が学習内容に大きく影響してくるといえる。例えば、児童の演奏技能だけを考慮して楽曲を簡素化しすぎて曲から感じ取れる曲想が失われたり、楽器の特徴を考慮せず楽器の配置をしたりといった内容では、十分な学習効果が得られないといえる。しかし、楽曲の教材研究の多くは、楽曲の社会的背景やなぜその楽曲を選択したのかといった視点に留まることも多く、音楽的分析をした上での楽曲の教材研究はまだ体系化されていないのではないだろうか。

### 3) 器楽教育における楽曲の教材化

以上を踏まえ、器楽教育において音楽的分析を考慮した楽曲の教材化をするためには、以下の各項目を段階的に捉えていくことが望ましい（図2参照）。

- ・音楽的価値を意識した楽曲の分析及び教材化
- ・発達段階や児童の実態に合わせた楽曲の変容
- ・楽を通して演奏表現の工夫を図り、演奏技能体得の促進をしていく
- ・合奏を通して、他者と音楽のイメージの共有を意識する

器楽教育の場合、児童らの演奏技能の向上はもちろん、音楽知識の理解や合奏を通して得られる情操などを踏まえた総合的な音楽活動へと発展していかなければならない。そのためには第一段階として、教師側が行う楽曲の分析や教材化の検討が大切

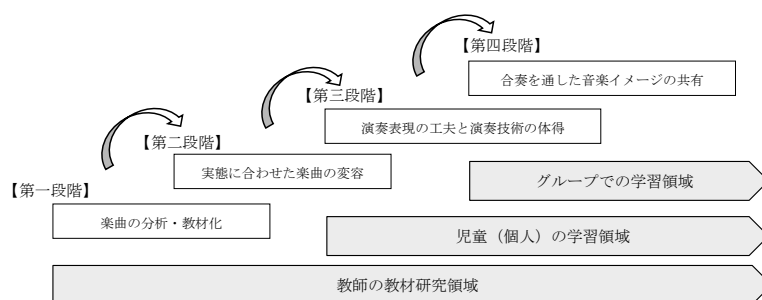


図2. 器楽教育における楽曲の教材化のイメージ

となってくる。どのような楽曲なのか、教育的価値のある楽曲なのかといった視点を持ち検討をしていく。次の第二段階では学生の学習状況や物的環境といった実態に合わせて楽曲を変容していかなければならない。しかし、ここで重要なのは楽器不足や人数不足に対応するため教材曲を安易に縮小や変容をさせることではない。授業のねらいからそれないよう楽曲の修正をしていくことが大切である。第三段階では、児童らの状況や授業のねらいを含んだ楽曲をもとに、児童らは演奏表現の工夫や技術の体得をしていく。そして第四段階に、個人の演奏表現や技能が合わさり、有効な合奏へとつながっていく。

このように器楽教育を行う際、教員側が教材曲の適正について音楽的要素を中心に分析した上で選択および判断し、学習のねらいに沿った楽曲の編曲や楽譜の選択をすることが重要である。そして、それらが児童の器楽活動の充実および発展の根底にあるのではないだろうか。

## 5. おわりに

器楽教育の中心は楽器演奏であるため教師側の視点や器楽教育の研究内容は演奏技能の向上や合奏方法に目を向けられやすい。しかし、児童らは演奏する楽曲を通して演奏技能を学んだり音楽の楽しさを感じたりすることから、教師は楽曲の適正について改めて着目する必要があるだろう。今日では、教科書や副読本の使用だけではなく、器楽合奏用の楽譜が多く出版されている。そういったものも活用しながら器楽の授業が行われているが、必ずしも児童らの人数や楽器の有無、授業のねらいといった学習状

況と使用する楽譜の内容が適合しているとは限らない。そういった場合には、教師が楽譜に手を加えることとなるが、楽曲のもとも持っている特性や楽曲のイメージが損なわれてしまう場合もある。それらが児童らの器楽の学習に影響しないよう楽曲の教材化を行うことが必要であり、その教材化をする前提に楽曲の分析的視点を教師が持ち合わせる大切ではないだろうか。教師が楽曲に対して有効な分析的視点が持てるよう器楽教育における教師の教材化に向けた取り組み内容を体系化していく検討が必要であると考えます。

## 引用文献

- 1) 藤井康之「器楽活動の意義を問い直す―歴史からひもとく―1.考える出発点：先人たちの理念と実践に触れる」今川恭子監修『音楽を学ぶということ―これから音楽を教える・学ぶ人のために―（幼稚園教諭・保育士・小学校教諭要請課程用）』教育芸術社、2016,p.49-50.
- 2) 文部科学省「音楽科、芸術科（音楽）の現状と課題、改善の方向性（検討素案）」文部科学省HP [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/06090504/003.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/06090504/003.htm) 最終アクセス2016年11月21日
- 3) 今川恭子「10年間の研究動向―乳幼児と音楽教育」日本音楽教育学会編『音楽教育学の未来』音楽之友社、2009,p.124-125.
- 4) 長井覚子「器楽活動の意義を問い直す―歴史からひもとく―3.考えを深めよう：器楽活動の現状と課題」今川恭子監修『音楽を学ぶということ―

- これから音楽を教える・学ぶ人のために—（幼稚園教諭・保育士・小学校教諭要請課程用）』教育芸術社,2016,p.54-55.
- 5) 文部科学省「小学校学習指導要領」2008, p75.
- 6) 文部科学省, 前掲, p.75-82.
- 7) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 音楽編」2008,p.3.
- 8) 小島律子「生成型学力を育成する和楽器合奏プログラムの理論的構成」大阪教育大学紀要 vol.1, 2014, p.79-91.
- 9) 衛藤晶子・廣津友香「だれもが主体的に参加できるアンサンブルの授業：（第3年次）—小学校中学年における器楽アンサンブル—（生成の原理による授業開発プロジェクト-仮説生成模擬授業を通して—）」日本学校音楽教育実践学会紀要, 18, 2014, p.65-72.
- 10) 村尾忠廣「〈暗意—実現プロセス〉理論による教材曲の価値判断, 選択および創作事例」日本音楽教育学会編『音楽教育学の未来』音楽之友社, 2009, p.110-119.
- 11) 梶田祐子「原曲のよさや特質を生かす教材化に関する一考察—「冬の歌」「雪のおどり」をめぐって—」日本学校音楽教育実践学会紀要,16,2012, p.231-232.

## 参考文献

- ・衛藤晶子「器楽アンサンブルにおけるイメージ形成への教師の働きかけ—小学4年生《おどれサンバ》の実践を通して—」日本学校音楽教育実践学会紀要 18,2014,p.129-130.
- ・畠澤朗「わが国における音楽教育の課題」椋山女学園大学教育学部紀要, Vol.5,2012,p.241-250.
- ・金指初恵「幼児のための合奏曲作りにいたる実践的試み—「ジングルベル」の教材化を通して—」埼玉学園大学紀要, 人間学部篇 12,2012,p.125-134.
- ・三村真弓・河邊昭子・福田秀範ほか「音楽リテラシーのための基礎的研究（２）—小学校音楽教科書のカリキュラムの検討を中心に—」広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, Vol.38, 2010,p.143-148.
- ・乙部はるひ「幼稚園における楽器活動の歴史的変遷と現在の問題点」帝京科学大学紀要, 8, 2012,p.27-36.
- ・島田郁子「子どもの学びを拓く音楽科単元学習の構想と実践の試み（３）—6年単元「BANDにチャレンジ—」日本学校音楽教育実践学会紀要, 15, 2011,p.121-122.

（受稿 平成28年10月19日, 受理 平成28年11月24日）